

・IBM ユーザー論文 募集のご案内・

書いたら書いただけの
経験 成長 価値 が得られるのが
「IBM ユーザー論文」です。

来年5月の「IBMユーザー・シンポジウム 福岡大会」での
発表を目指し、論文執筆にチャレンジしましょう

「応募要項の詳細」と「応募申込」は、論文ホームページから
<http://www.uken.or.jp/ronbun/>

論文応募申込締め切り

2011年 10/31 [月]

※「応募」をししないと、提出ができません。
論文執筆・提出のための「登録」です。

論文提出締め切り

2012年 1/13 [金]

●論文入賞者とその上司に聞く

(株)資生堂 [関東研]

「自分たちが一生懸命やってきたことを
書き留め、仕事をマニュアル化して、
次の仕事に生かそう」と考えれば、
論文は書けるはず

今年も「IBMユーザー論文」の募集が始まりました。昨年度(第49回)は127編の論文が提出され、数多くの事例研究の成果を会員の皆様からお寄せいただきました。その一方で、「目の前の仕事に追われて論文を書く余裕がない」といった声も聞かれます。そこで、第49回 IBMユーザー論文において、最優秀論文と入選論文を受賞された(株)資生堂様におじゃまし、執筆者とその上司の方に、論文への取り組み姿勢や執筆によって得られるもの、執筆のコツなどについてお話をお伺いしました。

—— 資生堂様は、数編のIBMユーザー論文を、毎年コンスタントに提出されていますね。第48回はそのうち1編が「ユニーク賞」を受賞、また第49回は入選2編で、そのうち1編が最優秀という栄誉に輝かれました。会社として、ユーザー論文にはどのような姿勢で取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

提著 情報企画部では年間で教育プログラムを策定していますが、OJT、外部のセミナー受講、そして論文執筆というのが大きな柱になっています。その中でも、大きなプロジェクトが終わったり節目を迎えたりする段階で、自分たちがやった仕事の成果を文章にまとめて発表することはとても重要だと考えており、IBMユーザー論文を活用させていただいています。

前回、最優秀を取った山口と矢島の論文ですが、昨年7月ごろに執筆テーマとなったシステムのヨーロッパへの導入が終わりました。その区切りという意味でやってきたことをまとめようということになり、山口が戦略面、矢島が現場で苦労した部分を担当し、共同執筆して論文を仕上げました。

—— 毎回、執筆者はどのように決めておられるのでしょうか。

提著 管理職に教育担当がおり、毎年IBMユーザー論文の募集の時期になると声が掛かります。前回、最優秀論文を受賞しているので、今回はハードルが高いですね(笑)。



上司
情報企画部 部長
提著 眞賜氏



上司/執筆者
情報企画部 次長
山口 隆氏
第49回 IBMユーザー論文
最優秀論文 執筆者



執筆者
情報企画部
佐々木 俊夫氏
第49回 IBMユーザー論文
入選論文 執筆者

—— 論文を執筆した方については、成長したとらえていますか。

提著 論文を書いたから成長したかということ、すぐにはその成果が見えてこないでしょう。ただ、論文を書くことが自分の勉強になることは間違いありません。次の仕事で資料を作ったり意見をまとめたりする時に、執筆の経験が生かせ、本人にとって十分メリットがあると思っています。

—— 第49回最優秀論文執筆者であり、また同じく49回で入選論文を書かれた佐々木さんの上司でもある山口さんにお話を伺います。山口さんは第48回、49回と2年連続で論文を提出され、今回、最優秀を受賞されましたね。

山口 ええ、第48回はユニーク賞をいただきましたが、実は、自分としてはもっと上の賞を狙っていたのです。今回は、3年前から手掛けてきたプロジェクトである「OneModel」システムのヨーロッパ導入・展開にひとつの区切りが付き、また現場の責任者として頑張ってきた矢島がフランスに赴任することがほぼ決まったので、その取りまとめをやるう

ということになり、論文を書くことになりました。矢島の赴任は年明けだったので、11月末までに論文を書き上げようと意気込んだのですが、なかなかその通りに進まず、年末の仕事納めの時でも論文はまだ未完成の状態でした。正月明けにフランスの矢島とメールでやりとりをして完成させ、締切に間に合いました。

——プロジェクトが進んでいる時から、論文のことは意識されてきましたか。

山口 いいえ。でも、論文があってもなくても、やったことをしっかり書き留めておくというのはすごく重要なことだと思いますよ。でも、意外にそれをしていないんです。特にうまくいかなかったことは早く忘れたいですからね。我々のグループでは、「自分の活動についてちゃんと記録を取ろう。それは自分に対する動機付けにもなるし、書き留めることでいろいろなノウハウもそこに見えてくる。仕事をマニュアル化して、次の仕事に生かそう」という話をしています。それをひとつの形にしたのが、ユーザー論文だったということになります。論文には、ヨーロッパへのシステム導入に当たって苦労したことを記録しました。それは反面教師として、その後、中国などに導入していく時の反省材料になっています。

——うまくいったことも失敗したこともちゃんと記録としてまとめ、後に続く人間のために生かすということですね。

山口 論文を書くというと、大きなことをやらないといけないように思え、負担に感じるかもしれませんが、「自分たちが一生懸命やってきたことをまとめる」と考えればできるはずですよ。佐々木も、それならできると論文を書くことになりました。

——佐々木さん、これまで論文を書かれた経験はありましたか。

佐々木 学生時代以降はなかったですね。実はその前の第48回の時にも、山口から論文を書いてみたらどうかという打診があったのですが、書くことができませんでした。今回は、自分の業務の棚卸しをするという動機付けがはっきりしていたので、執筆しました。

——書くのに大変だった点は？

佐々木 あまり大変だったという印象はありませんね。た

くさん時間をかけたらい文章が書けるといってもないので、12月上旬頃にはおおよその論は執筆できていました。その後、少しずつブラッシュアップしていき、年末に、上司に第三者の立場としてチェックしてもらいました。会社の中でやっていることが世間の常識だと思い込んで説明が足りなかったり、当事者だとなかなか見えなかったりする点を主に覚えてもらいました。

——「“いいかげん”から“良い加減”へ」というタイトル名は、結構考えられたのではありませんか。

佐々木 内容を細かく書く前に、上司と相談してタイトルを決めました。自分にプレッシャーを掛ける意味で、ちょっと変わったタイトルにしようと思いました。

——山口さんは、論文を書く時に注意した点はありますか。

山口 目次ですね。共同執筆者の矢島や他の方の意見も聞いて、3週間くらいかけて作りました。目次という構成部分ができてしまえば、あとは事実をそこに当てはめていけばいいだけです。もしこの構成をきちんと作らなければ、その後のスケジュール管理ももっと大変だったでしょう。論文は、いきなり本文を書き始める方もいらっしゃると思いますが、構成の大切さをきちんと理解してほしいですね。日常の業務で作成する提案書も、構成が重要です。まず目次を作り、あわせて目次の内容を具体的に表す要約部分を作るのです。そしてその行間を埋めていくつもりで論文を書いていけばいいのです。

——執筆者にとって役に立つアドバイスをありがとうございます。最後に論文執筆のメリットを教えてください。

佐々木 論文を書く、自分の仕事の棚卸しができることともに、やらないといけないができていなかったこと、もつとていねいにやるべきところに気付くことができます。

山口 上司の立場で言うと、例えば会議の席で、決められた時間内で必要な内容を的確に報告できる人とあまり上手でない人がいますよね。論文を書くということは、伝えたい要点を整理する技術を身に付けるという意味でも、いい訓練になります。論文を書くことは、日常業務にプラスアルファの負荷が掛かるかもしれませんが、それ以上に自分の仕事に大いに役立つと思います。

——ありがとうございました。U

論文概要

【第49回 IBMユーザー論文 最優秀賞】

「グローバル情報システム『OneModel』の構築と展開」

代表執筆者／(株)資生堂 山口 隆

共同執筆者／(株)資生堂 矢島 宇生

多くの企業において経営のグローバル化が求められており、当社もアジアを代表するグローバルプレーヤーとなる目標を掲げた。この実現のためには、組織やマネジメントのあり方の大きな変革が必須となる。その際の基盤となるのが情報システムであり、2010年から2013年にかけて標準的な基幹システム(SAP)を主な海外拠点に導入することを決めた。同時期、欧州にて業務改革とERPの導入計画が進行していたため、業務やデータの標準形となるテンプレート「OneModel」を開発し、相互連携を進めることとした。本論文では一連の活動を振り返るとともに、グローバル経営の基盤となる情報システム構築の一つのあり方を紹介する。

★これらの論文は、U研ホームページ「電子図書館」から閲覧・ダウンロードすることができます。(IDとパスワードが必要です)

★上記論文内容は「第22回 iSUC 天津大会」でも発表の予定です。詳細は、iSUCホームページ掲載の「セッション・アジェンダ」でご確認ください。

【第49回 IBMユーザー論文 入選】

「システム投資判断を“いいかげん”から“良い加減”へ～情報化投資評価シート利用による経営資源有効活用の実践～」

執筆者／(株)資生堂 佐々木 俊夫

企業の情報システム部門では、経営・事業戦略を実現するための情報システムの企画・開発を確実に実行するだけでなく、限られた経営資源(ヒト・モノ・カネ)の中で情報化をいかに効率的に実現していくかが重要な責務となっている。当社でも、中長期的視点での情報システム部門の活動方針を「経営戦略の実現に向けた情報戦略の策定と実行」として定義し、取り組んでいる。本論文では、情報戦略の実行課題のうち「情報化投資費用管理」に焦点を当て、当社で実践している取り組みを紹介する。この取り組みは、情報化投資管理の実践に苦慮している他企業においても水平展開できる可能性が高いと考える。